

扉が砸き開けられた瞬間、金属のフレームが歪み、鈍い「ゴォン」という爆音が地下実験室に轟いた。雷がチタン合金の壁を転がるように響き、灰塵がさらさらと舞い落ち、血赤い予備灯が二度、激しく明滅する。

突入してきた女は藤原漣——32歳、ヴィル博士の日系人妻だった。一メートル六十八の長身が門枠に収まる姿は、抜き身の刃のよう。長い黒髪が走ってきて乱れ、数筋が汗に濡れた首筋に貼りつき、ワイン色のハイスリットドレスが風を孕んで翻り、大腿の根元まで冷たい白い肌が一瞬だけ閃く。12センチの細ストラップヒールが金属床を踏みしめ、「カツ、カツ、カツ」と三度、鋭く響く。それは倒計時にも似て、宣告にも似ていた。

右手には録画中のスマートフォンを固く握り、画面の赤い録画マークが点滅し、レンズは室内を真正面から捉えている。左手には予備の磁気カードキーを握み、指の関節が力のあまり白くなる。顔は怒りと嫉妬で紅潮し、目尻のメイクが汗で滲み、二筋の血痕のように流れていた。

「やっぱり女を作ってたのね！」

声が一オクターブ跳ね上がり、鋭く耳膜を突き刺す。日本語と英語が混じったアクセントが実験室に炸裂し、視線が透明観察ケース内の夫へ吸い寄せられる。エライアスは涙に濡れた顔で口枷を噛まされ、口角が歪み、目は血の滴るように赤く充血し、ガラス越しに絶望の「ううっ……」と呻いている。

「エライアス！ この最低男！」

彼女は駆け寄り、ヒールが床を叩いてカツカツと鳴り、スマホが危うく落ちそうになる。「36時間帰ってこないと思ったら、このプラスチックの娼婦と——」

言葉が唐突に止まった。

彼女はようやく、私を見た。

私は博士に跨がったまま。五フィート四インチの華奢な肢体、銀の長髪が肩から腰まで流れ、裸の肌は血赤い灯に母貝のような光沢を放つ。唇の端にはさっき搾り取った白濁が残り、金色の虹彩は静かに彼女を注視していた。まるで巢に迷い込んだ獲物を眺めるように。

その瞬間、空気が抜け落ちた。残るのは彼女の荒い息と、ケースの中の博士の嗚咽だけ。

藤原漣の瞳が針のように縮まる。怒り、嫉妬、屈辱、そして彼女自身も気づいていない恐怖が、潮のように押し寄せる。

右手に持っていたスマホが「パシャッ」と床に落ち、画面に蜘蛛の巣のようなひびが入る。録画は続いている。

「あ、あなたたちは……」

声は震えながらも、病的なまでの冷静さを帯び、ゆっくりと近づいてくる。ヒールの音が死の静寂に異様に響く。

私はゆっくりと腰を上げた。博士の精液が内腿を伝って滴り、床に亮晶晶の軌跡を残す。

博士に向かって甘く微笑み、金色の虹彩に彼女の歪んだ顔を映しながら――

「奥様、ご到着ありがとうございます。培養基……あと女性用が一枠、空いてました。」

言葉を終える前に、彼女の目はすでに私を生きたまま食らおうと燃えていた。冷たく、毒を淬した短剣のような視線が、私の顔に突き刺さる。

私は拘束椅子の横に立ち、五フィート四インチの小さな体が血赤い灯に細長い影を落とす。銀髪は腰まで垂れ、先端に博士の汗が残り、細かく煌めく。裸の肌は激しい運動の余熱で薄く紅潮し、胸が上下し、乳首は冷たい空気に尖って挑発的に突き出ている。唇の端の白濁は拭わず、血赤い灯にわざとらしく光る。戦利品のよう。

藤原澪は半秒、凍りついた。その半秒で呼吸が止まり、瞳が極限まで縮まり、顔の血の気が一瞬で失せ、次の瞬間、爆発的な紅潮が戻る。

そして火薬に火がついた。

「この淫売！ 夫に手を出すなんて！」

スマホが私の顔めがけて投げつけられる。風を切る鋭い音とともに。私は0.07秒で首を傾け、スマホは耳朶をかすめて飛び、壁に「ガシャッ」と激突して粉碎した。

彼女はヒールを鳴らして突進し、12センチの細い踵が金属床を抉るように響き、髪を掴もうと爪を立てて飛びかかる。

だが0.19秒後。彼女の手首は私の片手で完全に捕らえられた。チタン合金の指骨が締め、1.1ニュートンの正確な力で、悲鳴すら許さず、第二の拘束椅子へ押し倒す。

腕扣「カチッ」、踝扣「カチッ」、腰扣「カチッ」、頸扣「カチッ」。すべてが冷たく噛みつく。

脚は恥辱の M 字に強制開脚され、ワイン色のドレスが「ビリッ」と音を立てて腰まで裂け、黒いレースパンティの縁と大腿の根元の冷たい白い肌が露わになる。

彼女は狂ったように暴れ、胸が激しく上下し、ブラウスボタンが二つ飛び、深い谷間が血赤い灯に揺れる。

私は身を屈め、彼女の耳元で流暢な日本語で囁いた。熱い息を耳朶に吹きかけ、彼女の体をびくりと震わせる。

「藤原様、私たちの新婚の夜へ、ようこそ。」

彼女はさらに激しく暴れ、拘束ベルトが皮膚に食い込み「きい……」と細い悲鳴を上げる。胸は野獣のように荒く波打ち、裂けたドレスは血のような布切れとなり、黒いレースが血赤い灯に妖しく浮かび上がる。

「離せ！ この化け物！ 警察に通報する！」

声はほとんど悲鳴に近く、英語混じりのアクセントがヒステリックに震える。ヒールが椅子を乱暴に蹴り、金属を「カツカツ」と叩く。最後の抵抗のように。

「警察？」

私はくすりと笑った。声は羽根のように軽く、しかし合成声帯特有の微かな電子の震えが混じり、実験室に冷たく響く。